

最後のご奉公

富山県 松島 米次郎

応 召

私は、明治四十一（一九〇八）年、黒部市荻生の農家で男五人女二人兄妹の末っ子として生れました。生来健康で九十歳過ぎまでゲートボールの会員として出席しました。学歴は小学校高等科卒で職業は農業であります。

兵役は、昭和十九（一九四四）年七月召集で海軍水兵で舞鶴海兵団に入団、同年九月、北方領土千島に派遣され、昭和二十年七月、青森県大湊に移動、軍港守備にあたり、八月二十日、戦争終結を知らされ、同月二十八日に帰宅致しました。

昭和十八年ごろから戦争は次第に厳しくなるにつれ、若い者から順々に召集令状が来て、自分より若い者がいなくなり、自分にも召集が来るものと覚悟しておりました。

案の定、昭和十九年七月二十日、その召集令状が届きました。海軍水兵舞鶴海兵団入団の召集で、その日は七月二十八日でありました。

私の年令は当時三十八歳であり、自分のような者まで必要であるとすれば非常に戦局が悪化した証拠だと思いました。生きて帰ることはないと思われ、どうせ戦場に行けば死身であるならば心置きなく応召したいと思い、田圃仕事を出来るだけ片付けるため、やりかけていた大麦の脱穀も夢中で終了しました。まだやりたいことが沢山ありましたが、小さい我が家の最後の奉公にベストを尽し得たことに心の安らぎを感じつつ召集の日を迎えたのでした。

海兵団の訓練期間は約一カ月でありましたがなにごんにも三十八歳で生れて初めての軍隊生活でしたから大変苦労しました。節水、入浴、洗濯、ハンモック等々日常の躰や規律が厳しいこと、またボート、防空壕などの基礎訓練の激しさ等、短期間でありましたから次から次へと習うことが多

く、その上毎晩のように気合いをかけられるので
す。

何か下手をやったり、ぐずぐずしているとみんなの責任として制裁を受ける。「まだお前等は娑婆のことを思っているのか。立派な軍人になっていないとは恥ずかしいことだ、残して来た親や子供、妻もいるだろうがお前達は気合いが抜けているからだ！」情け容赦は絶対ない「命令だ！」ばかりで「全員死ね」と言われたら死の覚悟ができてきました。まだいろいろありますが書き現わすことは大変に難しいが、戦場で敵と殺し合いをするには、平々凡々の暮しの気持ちでは到底太刀打ちは出来ない。先ず精神の入れ替えが必要だとつくづく思うようになりました。

自分は百姓をしていたから体力は他の人に負けなかった。しかし商人、町人等の人は身体が弱いので耐えることは大変だったと思う。人格者も医師も皆同一の新兵だからともどもに苦労の日を送り約一カ月を過ぎました。

軍隊の経験のある人達は、戦地に行けば少しは良くなるといっているので一日も早く戦地へ行きたいと願っていました。

出 陣

九月の初め、上司より「近日中にここを出て北方領土陸戦隊として第一線に立つことになった」と発表されました。

いよいよ近日中に戦地に出発するからと言うことで家族との面会が許されました。妻や娘が持つて来た弁当はとてもおいしかったが、これがこの世の終わりであろうと心に思ったものでした。ですから自分の苦しみは多く語らなかつたのです。皆に心配してもらっても自分のためにならないと思つたからでした。

何を話したかよく記憶はなく、特別の話をした記憶もないまま別れ、これが親子の別れであると覚悟しました。その時、北方に行く様子だと皆に言っておきました。

家族との面会が終わって数日後「舞鶴港の海兵

団より出発することになり、北方領土陸戦隊だ」と伝えられました。北海道方面である。出発の日が来て広場に大勢の見送りの人達や兵隊が並んで、音楽隊も加わって勇ましく見送ってもらいました。

先ず東海道線の貨物列車に乗せられ、東京駅で青森行に乗り換え、青森に着き函館で一泊し次の日の乗船に備えました。翌日、乗船の日が来ました。乗船したのは軍艦ではなく汽船でした。汽船の名は「白洋丸」で何百人が乗ったか分からないほど大勢の軍人でごったがえしていました。

「白洋丸」は今日も明日も突き進んで、時には上甲板に登って海を見渡すのですがどこを眺めても海原ばかりで何一つ見えるものはありません。船は敵潜水艦の襲撃や魚雷をのがれるため迂回しているのです。暗黒の海原の中に敵潜など何が潜んでいるか分からぬ中を蛇行しているのです。

あるとき、鯨が五く六頭現われ潮を吹き上げているのを物珍しく見ましたが、この鯨たちももしや敵潜水艦に追われているのでなかるうかと思っ

てもみました。一週間は過ぎ、前方水平線上に島のようなものが浮かんで来ました。「目的地に近ずいたぞ！」の声ではやる心を抑えながら上陸しました。

その島は千島列島の最北端で、カムチャツカ半島の南端まで約十二キロに迫る地点にある周囲三十キロの「占守島」でありました。上陸間もなく部隊名が発表され、その名は第五十二警備隊北方領土神風陸戦隊で、速射砲一台の担当となりました。

隊長は村山兵長で、次に保坂水兵長と蛸井兵長でした。この兵長二人は当年十六歳のキスカ島戦の生き残りで気性が荒く、舞鶴にいた時も同班で、厳しく制裁されたので皆から敬遠されていました。今回の編成でまたも同班となり一同とても困惑しました。しかしいよいよ戦場に立ったわけで、みんな心を合わせ任務遂行に努める覚悟を決めました。

上陸の翌日から早速訓練が始まりました。今度は速射砲だから新規に受ける訓練動作はとても大

変でした。また敵が上陸して来た場合には「箱爆雷」という爆雷を身に付けて敵の戦車の下に潜り、自爆する覚悟で飛び込む練習をし、勇士になる精神力をつける鍛練も行われました。

第一線の敵前での訓練、さらに部隊名は「神風陸戦隊」であり、毎日毎日同じ訓練の繰り返しでしたが真剣そのものでした。いよいよ最後のご奉公である。生存することや世の中のことを思ったり考えたことも無く、ただその時だけの毎日でありました。

現地はカムチャツカ半島真近で、その気象や食糧等につき若干ふれてみます。まず気象については、この島への上陸は九月でしたが、昼は大変長く、暗くなる時間は短い。北極に近いからで、時期により反対に夜が長く昼の短い時間帯もあります。

上陸以来日増しに寒さが強くなり、十一月ごろから積雪は少ないが時々突風が吹くようになり、寒さの中での訓練のため、防寒具の準備をし

ていても凍傷になる者が多く出ました。十二月になると零下三〇度が普通で、自分も右手の中指が凍傷になり二週間ばかり通院しました。風速三〇〜四〇メートルの季節風で気温が零下三〇〜四〇度までになると、眉毛がピチピチに凍ります。また四〇メートルの風では人は立ってられません。そんな時は幾人かそろってロープにつかまり並んで歩くのです。一人歩きは危険であるからです。

また兵舎は、この島は列島では珍しくも山は無く、丘のようになっているので、敵軍に発見されないように塹壕を掘り、その中に造った廊下の様な細長い建物でした。地面を掘った土の上に木をわたして屋根を造り、少し土を盛り、野草を植え、一見建物があるのに気付かないようにしてあります。多くの兵士の収容には大仕事であろうと思います。

寝起きには寒いからストーブで暖をとります。

この場合薪を燃やすのでその薪を作るのに木を切り取る作業をします。島には上に延びる木は一本

も無く、ハイ松”のような木を用意します。その木は幾百年も経た古木ですから堅木で、腕ほどの太さのものでも長時間燃えるのです。

次は食糧ですが、戦地へ行けば食べ物が少し良いと聞いていましたが、食糧は少なくて食うことに關しては餓鬼のようなものでした。身体が衰えて弱い者は栄養失調になります。自分は百姓育ちであるから皆より我慢が出来ました。

雪の無い間は海岸に行き、堤防のようになってある昆布の表面にある新しい昆布を拾って来て大きい空缶で煮て食べました。他に食べ物が無いから昆布を主食のようにして食べたのです。この島の生き物ではネズミがものすごく沢山いました。無人島で病菌がないということと食べる者、また夕方海岸に行つて見ると昆布で出来た堤防のように見える上に、カモメが沢山片足で立って眠っています。近づいても全然動かず捕まえる者もいました。カモメは人の恐ろしさを知らないのでしょうか。ともかく、どこにいても健全な身体を保つ

ことが何より大切で特に戦地に於いては大事なことでした。

敵 情

この島に着いた九月ころは、毎朝八時になると米軍機が二、三機飛来し、硝煙弾を落して帰って行きます。多分アリュウシャンから来るのでしよう。年が明けると次第に多くの編隊になり十機も連ねて来るようになりました。友軍機が時々まゝ二機応戦することがありましたが、制空権は全く敵に取られている有様でした。

転 任 友船沈没

六月末ごろの静かな晩、急な非常呼集で陸戦隊全部と海軍兵に整列集合の命令が出ました。なにごとかと武装して飛び出して整列して点呼を待ちました。「全員そろっているか」と改めて言葉がありました。

陸戦隊総司令官が出場して来て、「いよいよ戦争は悪化して来たので、君等に本土決戦の命令があった。いつときでも早く本土に到着し決戦に当る

から準備して全員乗船せよ」と伝達がありました。その準備は大変忙しくて寝る時間もない。自分の物はすべて衣類袋に入れたのでとても重くなりました。

また、兵器を運ぶ準備等や後始末で一生涯命でした。連絡船から本船の「白山丸」に、夕方までにどうにか全員乗船出来ました。

船の底の方に荷物を積み、上の大広場には兵士がぎっしり入り込みました。船は三隻で北海道陸軍兵用が二隻で、海軍の持ち物は重いので自分等の荷物は陸軍兵の船に積み込んでもらいました。

夕方に出発した船は、速度が速く航海し続け、翌朝、上甲板に上がって見渡すと四方八方が海で、水平線以外何一つ見えるものは無い状況でした。

二日目の晩十時ごろだったと思いますが、船がビリビリと破れた様な音と響きがして、なにごとかと誰も彼も一同が上甲板に上がって行きましたが電気は消えるしとても大変でした。上がるには階段ではなくて「ラッタ」といって縄で作った

大きいハシゴで、それに何十人もぶら下がり、まるで蟻が登るように次から次から登りました。やれやれと向こうを見ると、遠く前方の二カ所に火花かと思われる様な赤、青、色々と光って燃え上がる火が見えました。

それは大惨事である。敵の潜水艦から魚雷が発射され陸軍兵用の二隻の船に当り一瞬に沈没したのです。その時何千人かの兵士が亡くなったのですが自分等の船は助かりました。日本の護衛艦が付き添っていましたが大変でした。今度は進路を変えて、数日間ぐるぐる回りながら大海を航海し続けました。

八日目ごろにようやく遠方に陸地が見えて、それは北海道でした。敵がここまで来ましたが海は大波になり、やつと敵潜は見えなくなりました。占守島を引き揚げた三隻の内、一隻だけしか無事に着けなかったのです。船は、青森県の大湊軍港に到着しました。

大湊軍港で下船、即時トラックに乗せられ杉林

の山中に到着しました。早速杉を切り倒し、それを並べて、その上に用意してあった板を置き天幕を張って一休みしました。その後各班は分散し、離ればなれで住みました。毎日夜明けから敵の飛行機が来て、度々硝煙弾をばらまいて行きます。

このような中で新任務に追われているうちに八月二十日朝「戦争に負けた」と知らされました。戦況の不利は聞かされていましたが現実だったのか、多くの犠牲者に対しなんと伝えたらよいだろうか、今まで自分なりに苦労して来たことが「無」になるとは、一ぺんに力が抜けました。

ロシア軍の侵攻

信じられないことが起きました。それは自分達が六月末までいた占守島へ終戦日の三日後の八月十八日未明、ロシア兵が突如上陸し、これを迎え討つ我が陸軍兵との間に大激戦が始まったことです。

そのため、自分達が引き揚げる時に手を振って見送ってくれた兵たちはほとんど玉砕されたので

す。ちなみに、我が日本軍では、池田大佐以下、戦車六十台が全滅、双方の死者三千人と言われていますのでいかに壮烈な戦いであったかが伺われます。

むすび

私の服務した期間は約一カ年でありましたが、忘れることの出来ない日々の連続でありました。

その間で常に心に決めていたことは戦友のため、自分のために生きなければならぬということでありました。常に前向きな自己管理、つまり健康保持と旺盛な精神力の保有に努めました。亡くなった戦友を目の当りに見て痛切に感じた次第であります。

次になにごとにも運があります。特に生死の分かれる戦地に於いては然りで、私も服務中二回危機に遭いました。占守島より本土に向う輸送船の沈没とソ連軍の占守島侵攻とであります。

生涯最後のご奉公と死を覚悟して家を出たのに一年後の八月無事復員いたしました。これも一に

神仏のご加護と、多くの方々の厚情の御陰と両手を合わせ厚くお礼をした次第です。

【解説】

体験記筆者は明治四十一年生まれ、昭和十九年七月、満三十八歳の時に舞鶴海兵团へ召集され、

一カ月の訓練を経て九月に千島に派遣され、昭和二十年七月、大湊に移動、翌月終戦を迎える。

千島の派遣先は、千島列島の最北端、カムチャツカ半島に近い占守島で、第五十二警備隊北方領土神風陸戦隊で約一年間の勤務であった。

筆者は前記のように終戦一カ月前に大湊に移動、占守島へソ連軍の侵攻した八月の苦難を免がれ、生死の分かれる戦地での運命を痛切に感じている。

ソ連軍の占守島への侵攻は、カムチャツカ半島南端口パトカ岬のソ軍が、八月十四日、千島列島最北端の占守島に砲撃を加えたことに始まる。同島及び幌筈島を守備する第九十一師団は、満州及び樺太方面における対ソ戦の成行きを注視しつつ、

至厳な戦備を似て満を持していたといわれる。

八月十五日終戦の詔書によって、同師団将兵の驚きと悲憤は大なるものがあり、師団長は十七日方面軍司令官の訓示並びに「即時戦闘行動中止但し己むを得ざる自衛行動を妨げず」との命令を全部隊に伝達したと記録されている。

翌十八日午前一時半、ソ軍はロパカ岬の長射程砲の射撃に次いで占守島北端に上陸を開始し、我が部隊は自衛の応戦に努めたものの、ソ軍逐次地歩を拡大してきた。師団長は、まず占守島は南端の部隊の中の歩兵一個大隊、戦車一中隊に当面の敵を攻撃させ、引続き戦車一個連隊、歩兵一個大隊、工兵一大隊による反撃を行った。

戦車第十一連隊（長・池田末男大佐）は払暁ごろから戦闘に参加し、後続諸隊も参加してソ連軍を水際に撃滅せんとしたが、方面軍から「即時戦闘行動中止」の命令を受け、午後四時師団長は停戦を命じた。

かくして二十三日、ソ連軍艦上にて局地停戦協

定が締結され、占守島の戦いは終了した。